「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.30
草　雲

［１］広恵寺堤と広恵寺遺跡

広恵寺堤は岐阜県中津川市福岡植苗木にあります。広恵寺堤の水が退いて堤の底が現れると、やじりや石錐（いしきり）を拾うことができます。先史遺跡で、「広恵寺遺跡」と呼ばれています。

縄文時代、広恵寺堤の辺りは、山地湿原・沼であったと考えられます。広恵寺堤の東側の広恵寺観音堂の裏の深山（みやま）の小川を源流としていました。人々は、弓矢で狩りをし、小川や沼で魚を捕り、山や原野や湿原の植物を採り暮らしていました。

写真は、広恵寺堤の底で拾った黒曜石の「やじり（打製石器)」です。一番近い黒曜石の産地が長野県霧ヶ峰周辺であることからして、縄文時代には既に、かなり広い範囲に亘っての交易があったことを意味し、驚きと感動を隠せません。

また、広恵寺堤はそれの東側の城南の平地にある広恵寺城(苗木城の前身)の水堀の役目も果たしていました。

【広恵寺堤と城ヶ根山（堤の中央が弁天島)】

【広恵寺堤の底で拾った黒曜石のやじり（打製石器)】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.30
草　雲

［２］城ヶ根山頂

今から 700 年以上前の鎌倉時代から室町時代にかけての 200 年以上もの間、岐阜県中津川市福岡植苗木の城ヶ根山頂周辺及び城ヶ根山麓には、広恵寺城(苗木城の前身)がありました。城ヶ根山頂周辺は、見張り小屋や砦が築かれ、防御のために使用されていたと考えられます。

下図のように、城ヶ根山頂周辺には、岩を利用した複数の曲輪が残っています。

（西）

（東）

【城ヶ根山頂周辺の見取り図】

【城ヶ根山】

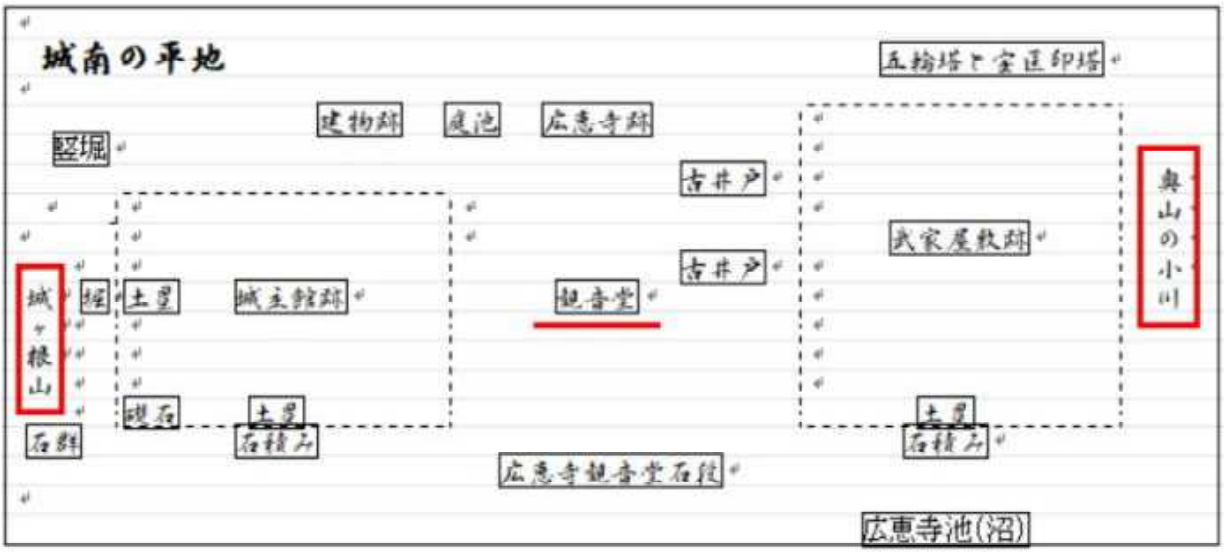
「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.30
草　雲

［３］城ヶ根山頂への登り方

下の見取り図を見て下さい。
観音堂の北側の城主館跡の北側の城ヶ根山の斜面を真っ直ぐ登って行きます。（道はありません。）
前ページの【城ヶ根山頂周辺の見取り図】の右端辺りの尾根に達するので、尾根に沿って西へ向かって（見取り図の左へ）、Ａ地点（次ページで解説）まで移動してください。
Ａ地点からスタートします。
昔日は、西の尾根に沿って登り、最初にＡ地点に達する道がありました。しかし現在、この道が使えないので、観音堂の横から直接登る方法をとっています。

（北）



（南）

【城南の平地の見取り図】

【広恵寺観音堂石段と観音堂】

【奥山の小川】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.28
草　雲

［４］５の平地

西の尾根をほぼ登り切り、傾斜が緩くなるところに、１８×１３ｍ程の「５の平地」（下図参照）があります。
ここからが本格的な城域になります。
南側は絶壁になり、北側は岩壁で傾斜が続きます。西側には虎口（Ａ地点）が開きます。おそらく、門跡でしょう。

（西）

（東）

【５の平地の西側の虎口で岩を利用した門跡（城域の西端）】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.28
草　雲

［５］５と４の間の平地

５の平地から３ｍ登ると、虎口状地形で、周辺が露岩で囲まれている１５×１０ｍ程の「５と４の間の平地」（下図参照）があります。
この平地の南端の岩上（Ｂ地点）から、城南の平地を望むことができます。
南側は岩壁で、北側には削平地があり傾斜が続きます。
虎口 ･･･ 門に枡形を造り、曲がって出入りするようにした出入り口

（西）

（東）

【虎口状地形】

【周辺を囲む露岩】

【Ｂ地点からの展望】

【Ｂ地点からの展望（昔日）】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.28
草　雲

［６］４の平地

前述の周辺が露岩で囲まれた平地を経ると、２５×２５ｍ程の「４の平地」（下図参照）があります。
南側は急な崖です。北側は傾斜が続き、削平地が見られます。

（西）

（東）

【４の平地の北側の斜面にある削平地】

【４と３の平地の境のＣ地点】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.28
草　雲

［７］３の平地

４の平地の１ｍ段差で、２０×１５ｍ程の「３の平地」（下図参照）があります。
南側は急な崖で、北側は沢状になり２５ｍ下の大石の所に姫井戸があります。

（西）

（東）

【３の平地の北側斜面の大石と姫井戸】

【３の平地の北側斜面にある姫井戸】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.28
草　雲

［８］２の平地

３の平地から１ｍ段差で、２０×２５ｍ程の「２の平地」（下図参照）があります。
南北両側面は、岩壁で守られた所になります。

（西）

（東）

【２の平地の南側を守る岩壁】

【２の平地の北側を守る岩壁】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.28
草　雲

［９］１の平地

２の平地の東の「１の平地」は少し狭くなります。
南東隅が１ｍ程高く、槽台状になり、ここに三角点があります。
１の平地と２の平地が主郭（本丸）になります。
南側は岩壁で、北側は傾斜が続きます。

（西）

（東）

【主郭（本丸）である１と２の平地】

【１の平地の槽台状地形】

【槽台状地形にある三角点】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.28
草　雲

［１０］Ｄの地点

１の平地の東側の岩と岩の間の「Ｄの地点」（下図参照）に虎口が開きます。

（西）

（東）

【１の平地の東側の虎口（Ｄの地点）】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.28
草　雲

［１１］Ｅの地点

Ｄの地点の虎口の下の「Ｅの地点」（下図参照）には、門跡（関門）があります。

（西）

（東）

【Ｄの地点の虎口の下の門跡（Ｅの地点）】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.28
草　雲

［１２］アの地点

Ｅの地点の門跡の下の「アの地点」（下図参照）に、上幅８ｍの堀切があります。

（西）

（東）

【Ｅの地点の門跡の下の堀切（アの地点）】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

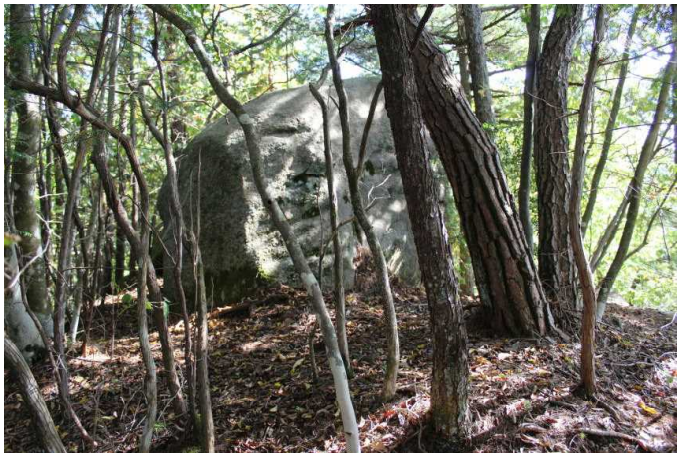
2023.10.28
草　雲

［１３］６の岩峰

アの地点から３０ｍで、搦め手（裏門）の「６の岩峰」（下図参照）があります。
南側は岩壁で、北側は傾斜が続きます。

（西）

（東）



【６の岩峰】

【搦め手（東側からの６の岩峰）】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.28
草　雲

［１４］６の岩峰の下

６の岩峰(搦め手・裏門)の下に馬出し風の曲輪があります。
ここで城域が終わります。
岩を利用した関門を設置した東西 150m、南北最大 30m の城の姿が想定できます。
岩を利用した城造りは、苗木城の城造りに引き継がれました。
馬出し ･･･ 城門前に築いて、人馬の出入りを敵に知られないようにした土手
曲輪 ･･･ 一定の区域の周囲に築いた土や石のかこい

（西）

（東）

【６の搦め手の下の馬出し風の曲輪（城域の東端)】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.11.01
草　雲

［１５］大手門への門跡(関門)

現在、猪による被害を防ぐために、城ヶ根山頂への登山口（広恵寺城の大手門への登り口）は、柵によって塞がれています。傾斜が緩やかな城ヶ根山の西の尾根伝いに登る道です。豚小屋跡の右を北方向へ登って行き、途中で右折して東へ進行方向を変えます。東方向へ登って行くと、途中に門跡らしき関門に２度出会います。更に登って行くと、「５の平地」の西端Ａ地点の虎口（大手門）に着きます。

（ 西 ）

（東）

【門跡(関門)】

【門跡(関門)】

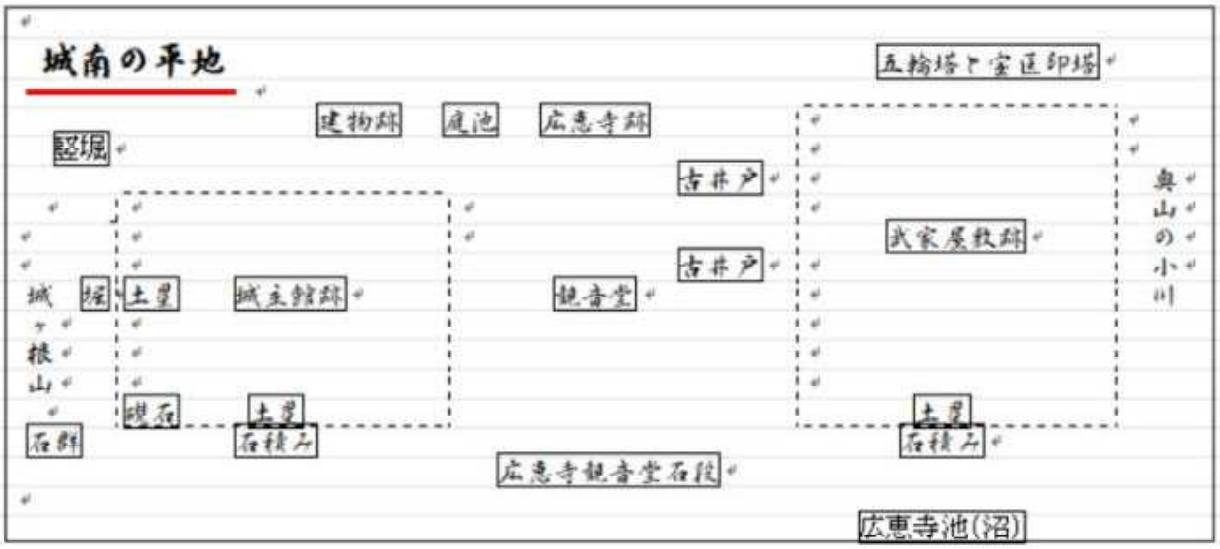
「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.31
草　雲

［１６］城南の平地

城ヶ根山の南側の山麓には平地があり、「城南の平地」と呼ばれています。
城南の平地には、広恵寺城主館、武家屋敷、広恵寺があったと伝えられています。
広恵寺城(苗木城の前身)は、城ヶ根山頂周辺と城ヶ根山麓の城南の平地から成る山城でした。
城南の平地は、居住や政務のために使用されていたと考えられます
鎌倉幕府が開かれた鎌倉は、三方が山に囲まれ、一方が海の要害の地でした。広恵寺城のあった城南の平地も、三方が山に囲まれ、一方が広恵寺池（沼）の要害の地でした。

（北）



（南）

※ 赤のアンダーラインが該当箇所です。

【城南の平地と広恵寺堤】

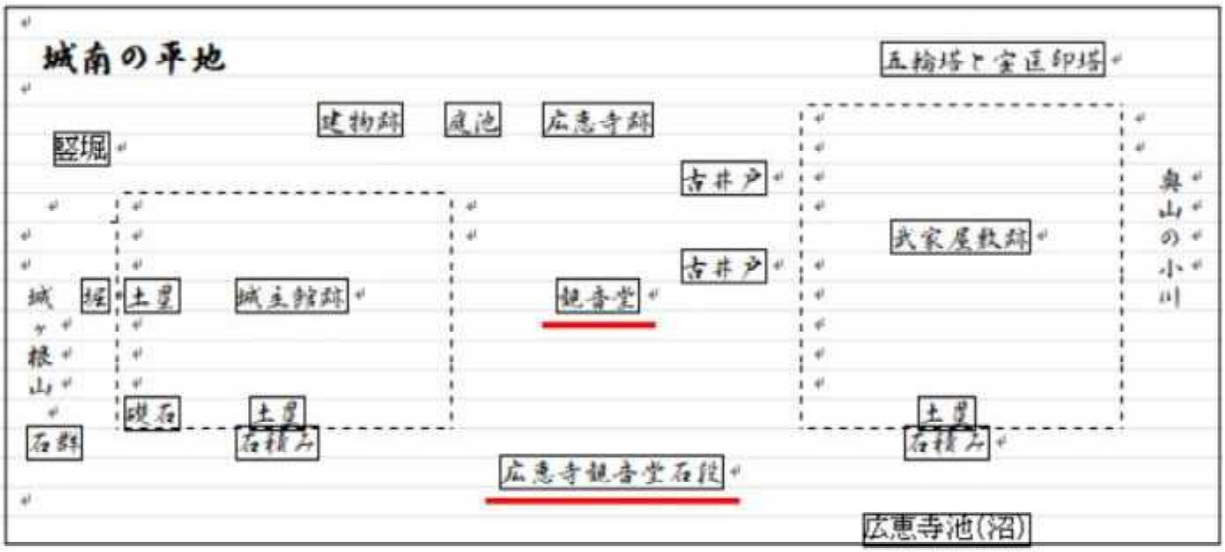
「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.31
草　雲

［１７］広恵寺観音堂と石段

写真の現在の観音堂は、1985 年（昭和 60 年）に建て替えられたものです。
こ観音堂は 1695 年、1789 年、1883 年、そして、1985 年の 4 回、およそ 100 年に 1 回の間隔で、立て替えられています。

（北）



（南）

※ 赤のアンダーラインが該当箇所です。

【石段と観音堂】

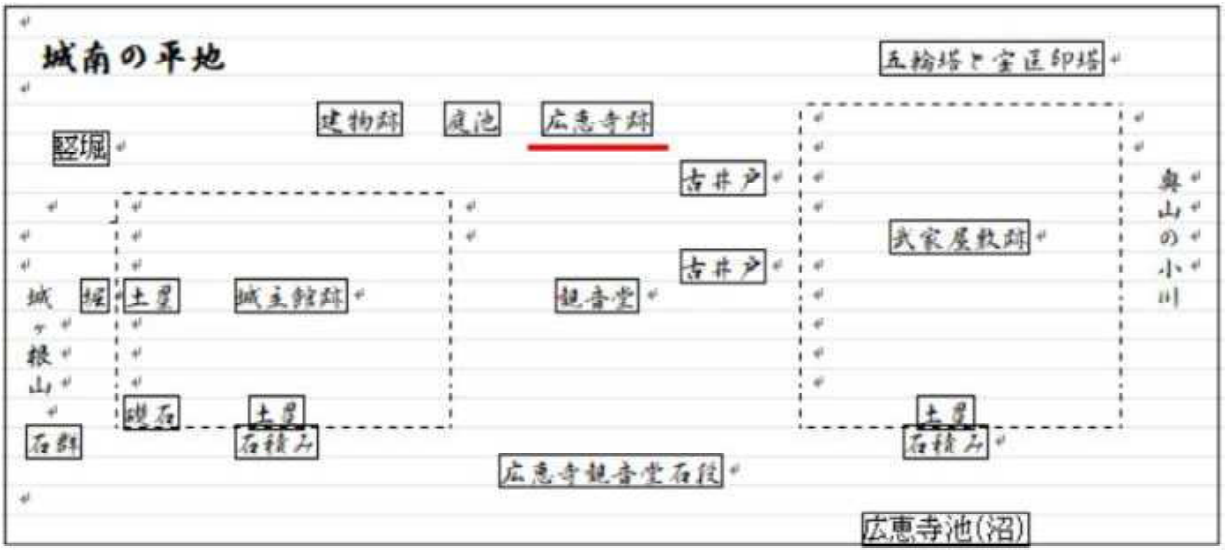
「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.31
草　雲

［１８］広恵寺跡

広恵寺は、夢窓疎石の弟子の枯木紹栄禅師によって、1350 年に開山されました。
江戸時代に入り、後継住職が絶えて自然廃寺となり、観音堂のみ残されました。しかし、この観音堂も明治の初めの廃仏毀釈により取り壊されました。
広恵寺は、写真の現在の観音堂の後ろの一段高い所にありました。

（北）



（南）

※ 赤のアンダーラインが該当箇所です。

【広恵寺跡（観音堂の後ろの一段高い所)】

【広恵寺跡地】

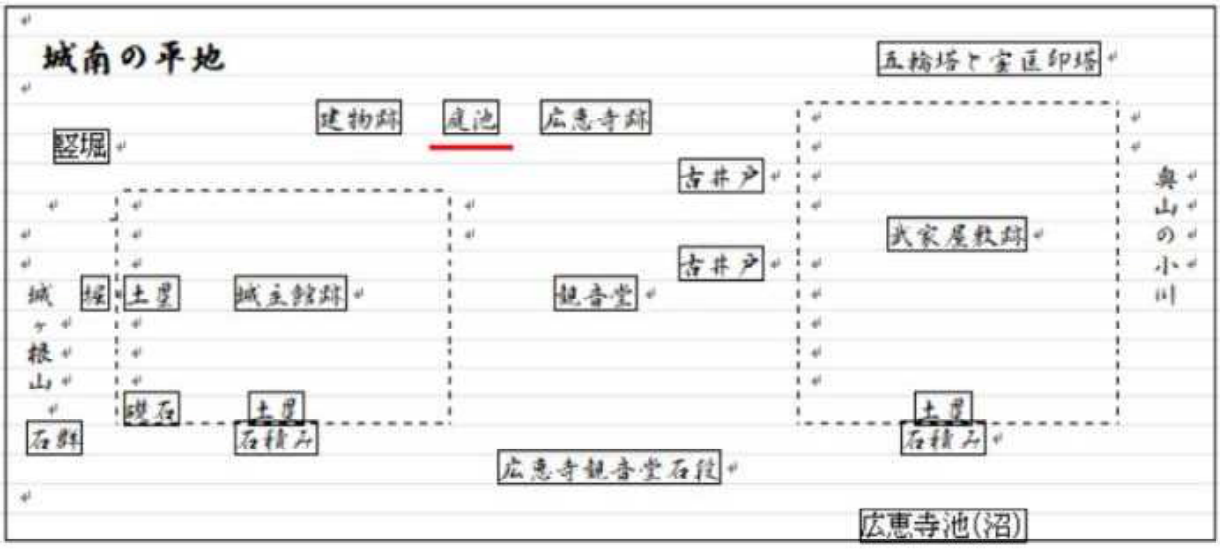
「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.31
草　雲

［１９］広恵寺庭池跡

現在の観音堂の後ろの一段高い所に位置する平地にあった広恵寺の庭池跡です。
岐阜県多治見市の虎渓山の永保寺の庭や京都市の天竜寺の庭に共通するものを感じます。広恵寺、永保寺、天竜寺、どれも夢窓疎石に関係のある臨済宗の寺です。

（北）



（南）

※ 赤のアンダーラインが該当箇所です。

【広恵寺庭池跡】

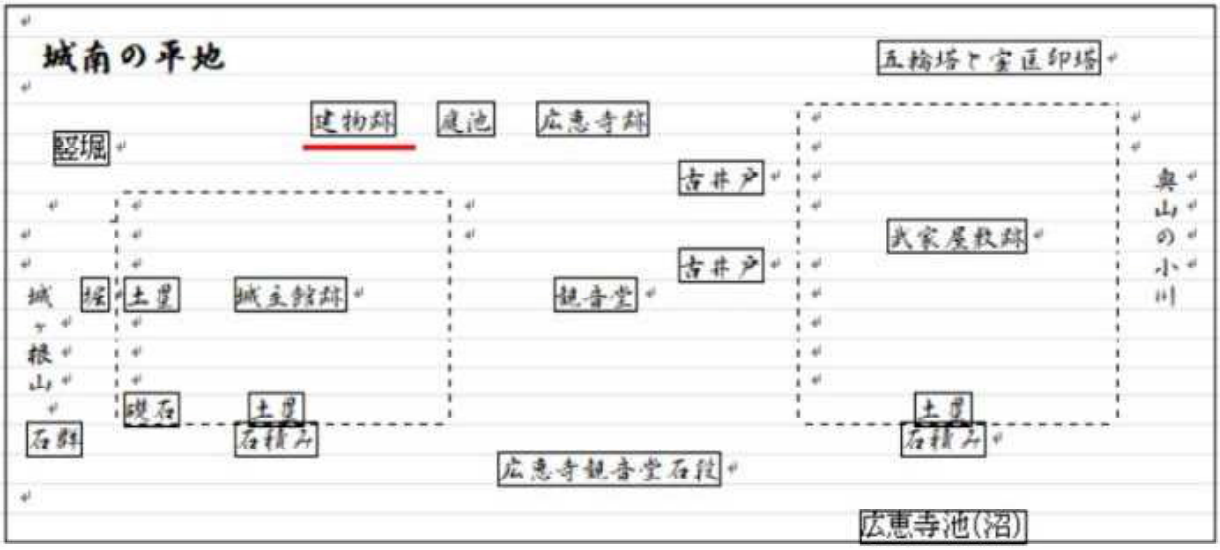
「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.31
草　雲

［２０］広恵寺建物跡

広恵寺庭池跡の北隣で、庭池跡より一段高い所にも平地があります。
建物に使用されていたであろう石ころが多くころがっています。この平地から庭池を眺めることができます。

（北）



（南）

※ 赤のアンダーラインが該当箇所です。

【広恵寺建物跡】

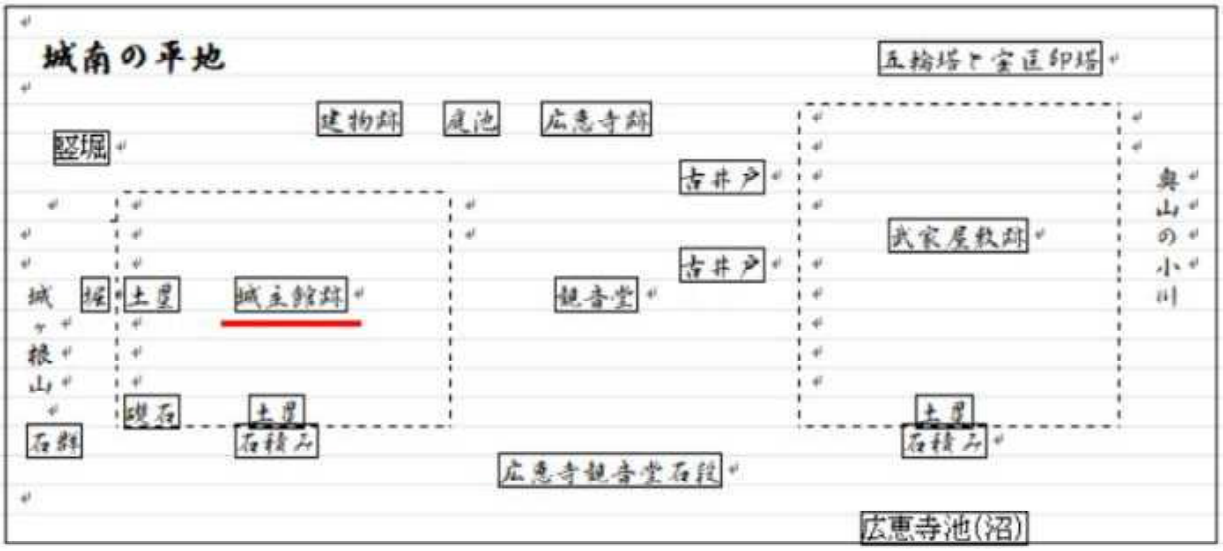
「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.31
草　雲

［２１］広恵寺城主館跡地

現在の観音堂の北側に隣接する平地です。広恵寺城主館があったと考えられます。
現在は竹林に覆われていますが、かなり広い平地で、石積み、礎石、堀・土塁の跡が残っています。

（北）



（南）

※ 赤のアンダーラインが該当箇所です。

【広恵寺城主館跡地】

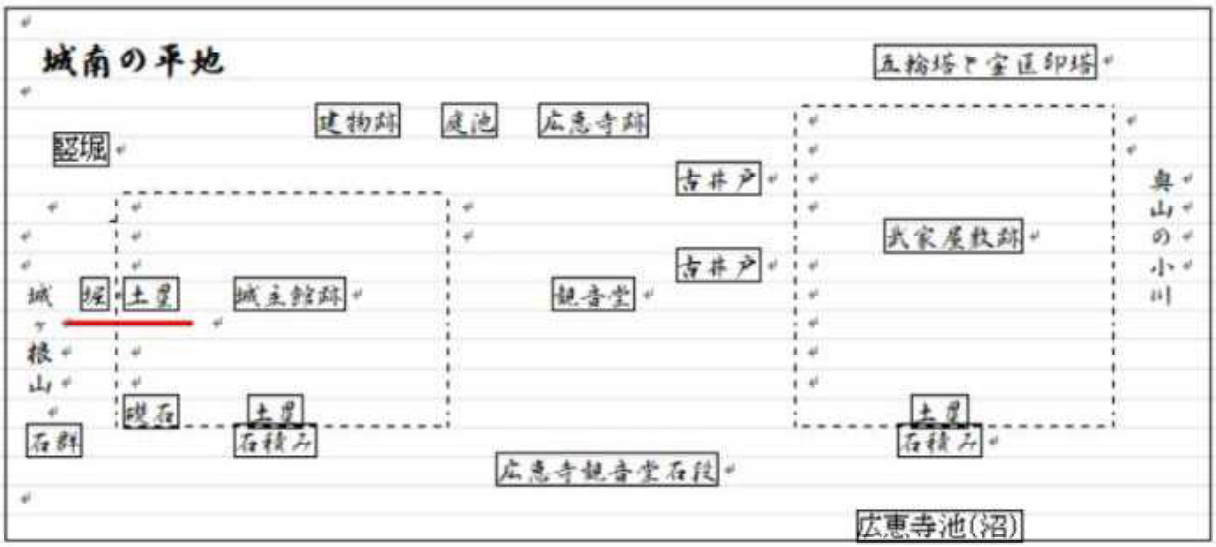
「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.10.31
草　雲

［２２］広恵寺城主館の堀・土塁跡

写真は、現在の観音堂の北側に隣接する広恵寺城主館跡地に残る堀と土塁の跡です。

（北）



（南）

※ 赤のアンダーラインが該当箇所です。

【広恵寺城主館の堀・土塁跡】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

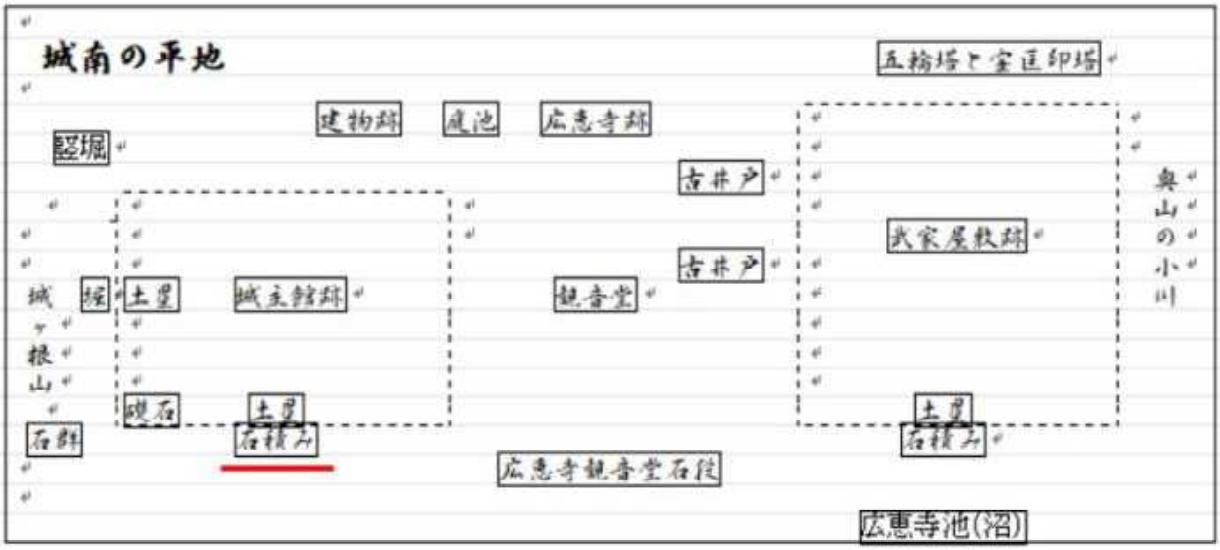
2023.10.31
草　雲

［２３］広恵寺城主館の土塁跡

広恵寺城主館の土塁は、片岡寺跡（次ページ参照）に残る土塁の規模であったと推測されます。

この館は、居住や政務のために使用されていたと考えられます。

（北）



（南）

※ 赤のアンダーラインが該当箇所です。

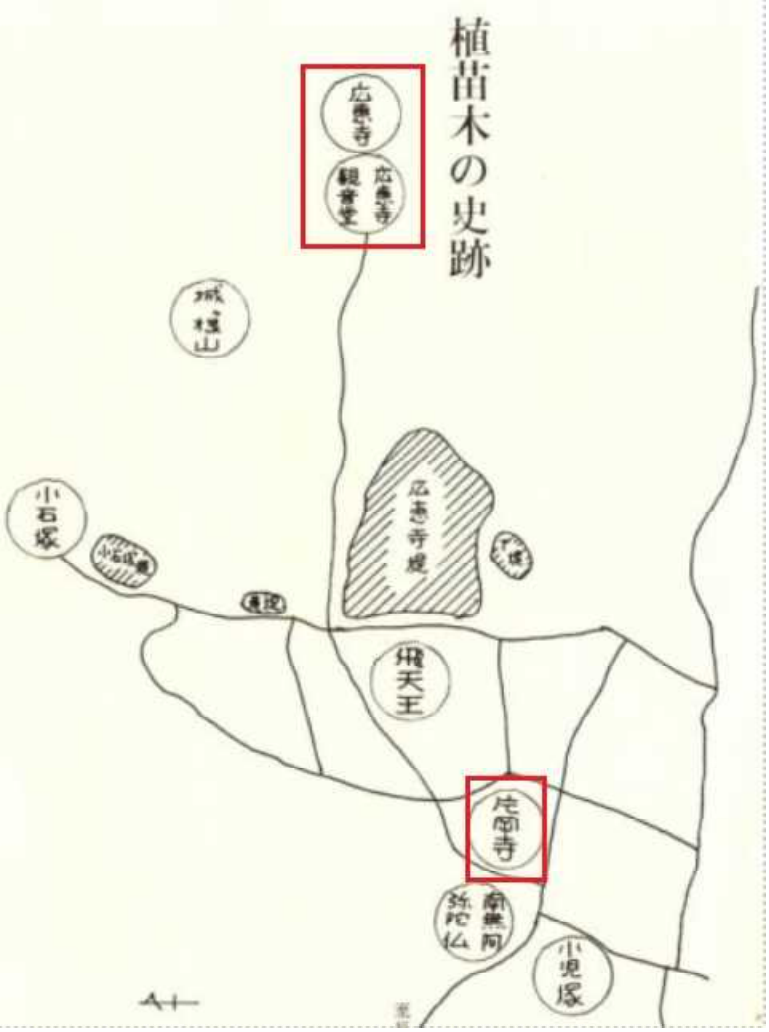
【広恵寺城主館の土塁跡】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.11.02
草　雲

［２４］片岡寺跡の土塁

　片岡寺は、1651 年に植苗木に創建されました。(右図参照)
　現在、中世の武家屋敷の面影をとどめた四方堀の土塁の一辺（高さ３ｍ、幅１０ｍ、長さ９０ｍ）が残存しています。
　広恵寺城主館跡または家老屋敷跡に、片岡寺が創建されたと考えられます。
　なお、広恵寺観音堂から片岡寺までの間に家老屋敷が数軒あったと伝えられています。
　また、植苗木には、他にも、「飛天王」、「南無阿弥陀仏名号塔（三十三観音石像)」、「小児塚」、「小石塚」等の史跡があります（右図参照)。
　飛天王は、広恵寺城主の遠山家の代々の氏神でした。
　「植苗木」の地名は、飛天王の起源に由来します。
　更に、福岡榊山神社の例大祭（たたき祭り）は、飛天王の祭神の牛頭天王の故事に由来します。



【植苗木の史跡　位置図】

【片岡寺跡の土塁】

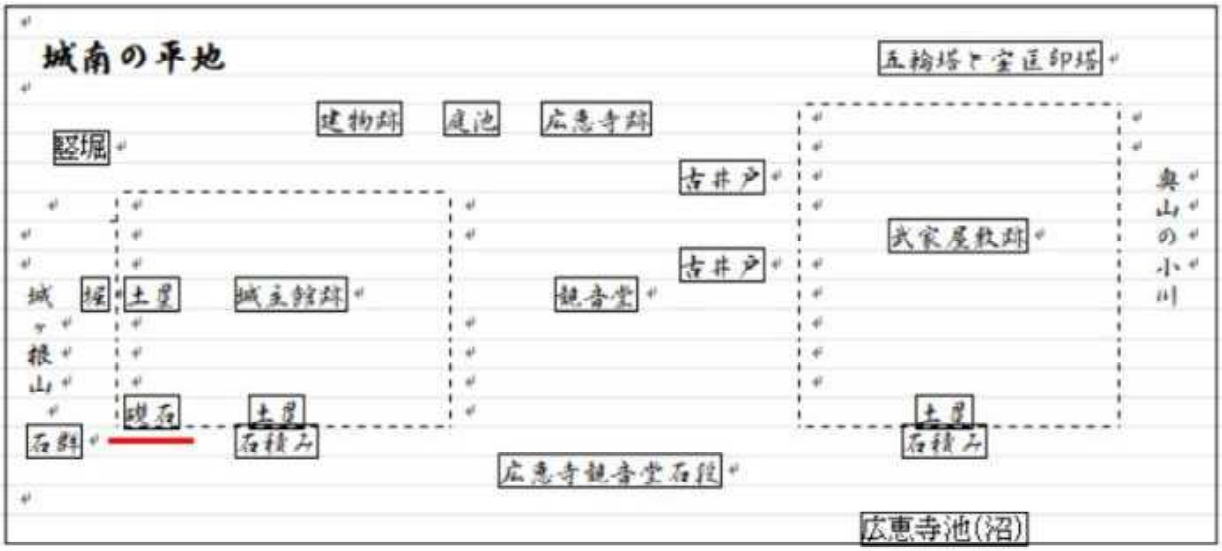
「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.11.02
草　雲

［２５］広恵寺城主館礎石

広恵寺城主館跡地に残る礎石です。
広恵寺城主を「遠山一雲入道」と称していたことからして、広恵寺城は、広恵寺と一体化したものでした。

（北）



（南）

※ 赤のアンダーラインが該当箇所です。

【広恵寺城主館の礎石】

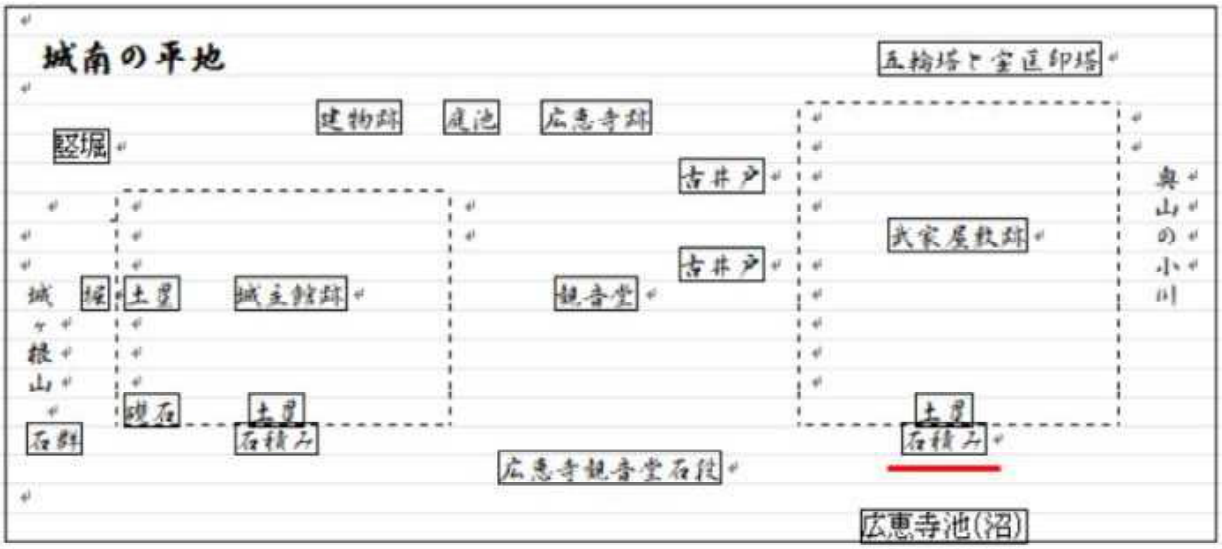
「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.11.03
草　雲

［２６］城南の平地の石積み

現在の観音堂の南側にも、平地が隣接しています。
竹林に覆われていますが、城南の平地の半分以上を占める広さがあります。
広恵寺城家老屋敷などの家臣の武家屋敷が数軒あったと考えられます。
この平地の南側の脇を奥山の小川が流れています。
写真はこの平地を支える野面積みの石積みです。
石垣は戦国時代以降に建造されるようになったと言われています。広恵寺城は 1526 年に苗木の高森へ移城しました。城南の平地には、広恵寺と城主館跡と武家屋敷跡が残りました。武家屋敷跡には脇を流れる奥山の小川の水を引き入れて、田畑として利用されたようです。このとき、城南の平地を補強するために、この野面積みの石垣を組んだものと考えられます。

（北）



（南）

※ 赤のアンダーラインが該当箇所です。

【城南の平地の石積み】

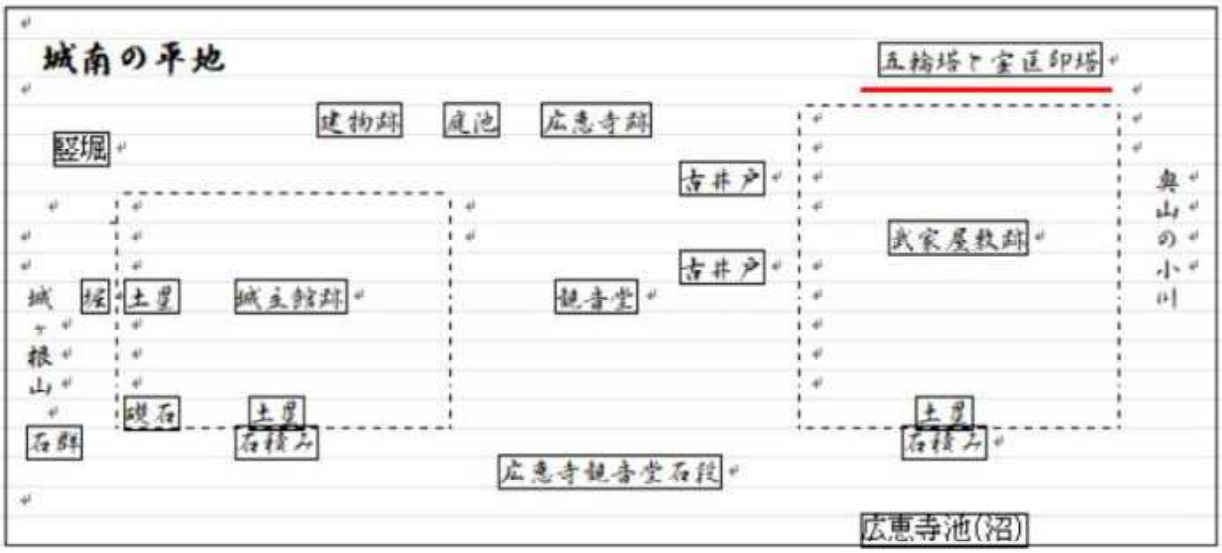
【城南の平地の石積み】

「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.11.04
草　雲

［２７］五輪塔・宝匡印塔

現在の観音堂の後方、100 m程の位置にある五輪塔・宝匡印塔です。
五輪塔が１基と宝匡印塔が８基あります。
広恵寺住職の墓、または広恵寺城主とその親族の墓と考えられます。
五輪塔・宝匡印塔の後方には、城ヶ根山頂の広恵寺城の搦め手（裏門）へと通ずる道があります。



（北）　（南）

※ 赤のアンダーラインが該当箇所です。

【五輪塔・宝匡印塔】

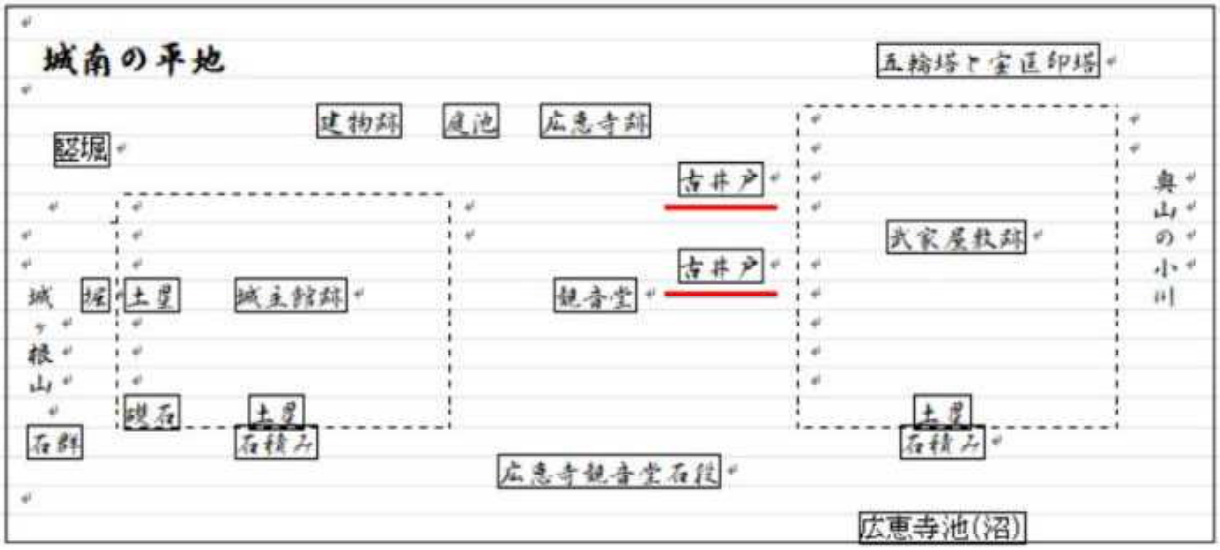
「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.11.04
草　雲

［２８］広恵寺古井戸

現在の観音堂の後方、10 m及び 20 m程の所に、それぞれ広恵寺の古井戸があります。
写真は後者になります。

（北）



（南）

※ 赤のアンダーラインが該当箇所です。

【広恵寺古井戸】

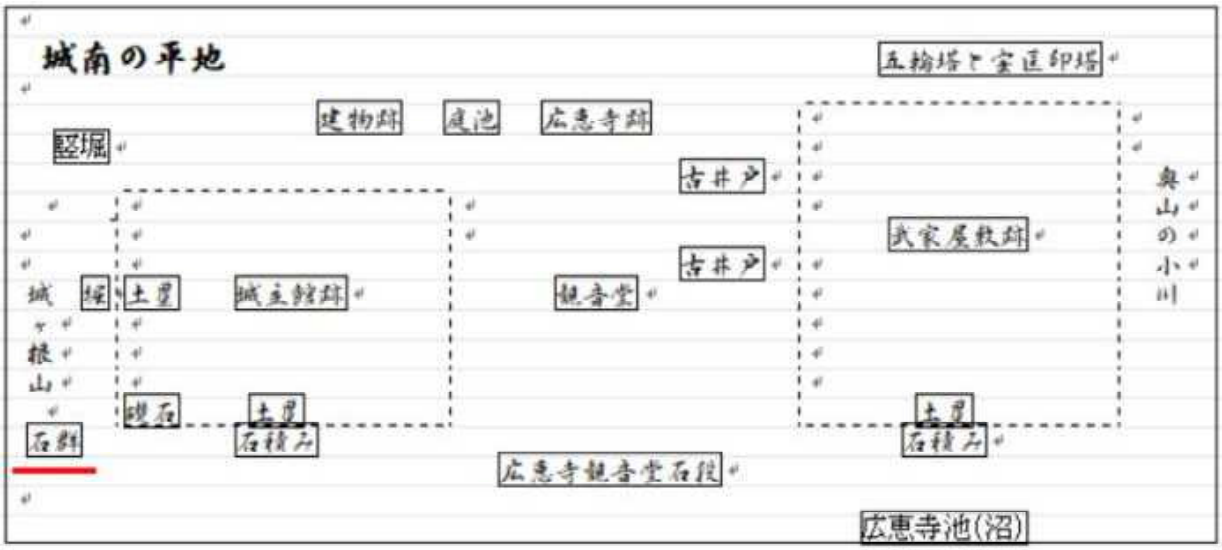
「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.11.04
草　雲

［２９］一直線上に並ぶ石群

現在の観音堂の北側の平地の北端で、城ヶ根山の傾斜が始まる所に、東西一直線に、大きな石が等間隔に整然と並んでいます。この石の列はかなりの長さで続いています。
防御のために使用されたものと考えられます。

（北）



（南）

※ 赤のアンダーラインが該当箇所です。

【一直線上に並ぶ石群】

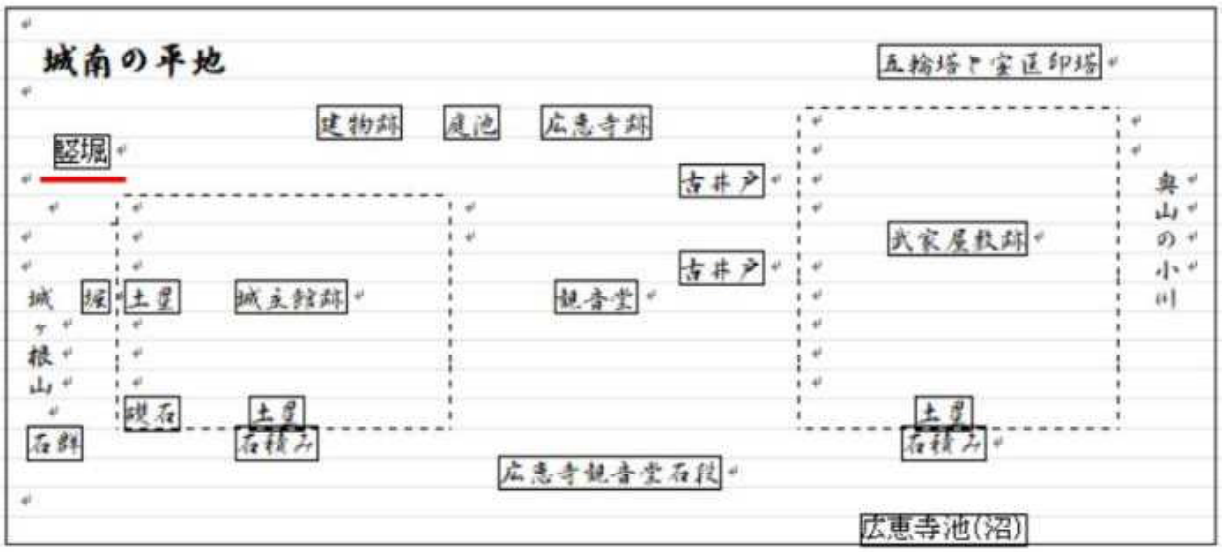
「境目の山城と館(宮坂武男著)」の城ヶ根山をめぐる

2023.11.24
草　雲

［３０］竪堀

現在の観音堂の北側の広恵寺城主館跡の北東に大きな竪堀が残っています（下図参照)。

（北）



（南）

※ 赤のアンダーラインが該当箇所です。

【竪堀】